

横浜国立大学附属図書館ビジョン

知を共有し、知を媒介し、知を創出するコモンズとしての世界水準の図書館

公開版

令和4年3月22日 制定

附属図書館運営委員会

「横浜国立大学附属図書館ビジョン」の策定にあたって

附属図書館長 大原 一興

近年大学図書館には、必要に応じて引き出されるべき知識を効率よく収集・集積する出納型の施設としての役割だけではなく、異種の研究教育分野の交流により多様な知の共有をうながす場として、また、研究大学においては新たな知を創出する生産・創発型の施設としての役割も求められるようになってきています。言い換えると、附属図書館は、これまでのラーニング・コモンズの中心的役割に加えて、さらにイノベーション・コモンズの一端を担う大学の一員としての役割が問われる時期にきているといえます。

創発のためには、異分野間の知の交流や触発が有効ですが、その物理的空間として人が交流し議論をする場が求められます。とくに横浜国立大学では、文系と理系が近接しているコンパクトな統合型キャンパス構成の特色を活かすことができ、さらにその要の部分における中央図書館の立地を活かして、情報集積空間としても物理的交流空間としても、まさにコモンズとしての図書館空間の価値が発揮できる条件にあります。一方で、学生は他分野に関心を持ち、キャンパス生活においても学生・教職員の中心的位置に、日常的な展示や情報交換などを通じた研究成果の相互交流が求められていると思われまます。

ここでは、国立大学図書館の将来像を示すビジョン（大学図書館のあり方）と、第4期中期目標・中期計画（横浜国立大学のあり方）から、横浜国立大学附属図書館に求められる特色ある将来像として、5つの展開軸を設定しました。それぞれについて、およそこの10年で進展すべき展開の方向性を示すとともに、それに従って想定されるサービス機能や設置されるべき空間などの例を示して、整備展開するための指針とすることとしました。

すなわち、図書館の根幹としての①「知識基盤」の質的变化やオープン化への対応、それには、知の発展や創出をはかるための②「交流空間」を充実させること、その方向性としては横浜国立大学の重点的な方針としての③「先進実践」と④「地域共創」に対応した知識コンテンツを充実させること、さらにこれらの総体を⑤「持続可能」に運営するための組織基盤づくり、という、充実を図るための5つの要素について、具体的な展開例を示すこととしました。展開例・拡張機能についての実現の難易度はまちまちですが、当面考えられる可能性のあるものを列挙しています。

現在提供しているサービスを保ち充実をはかりつつ基礎的な運営を継続していくことに加えて、様々な新たな試みを実施するには、既存組織内部の再編や通常の財源だけでは限界があり、新たな組織や空間、また他部署との連携・協働が欠かせません。

関係部署におかれましては、私たち図書館の自覚・再認識だけでは新たな局面に対応していくのは困難であることをご理解いただき、一体的に横浜国立大学の発展を支えるために、ぜひとも協力体制を構築することに賛同いただき、そのきっかけとして本ビジョンが活用されることを望んでいます。

■ 趣旨

本ビジョンは、「知の統合型大学」として世界水準の研究大学を目指す横浜国立大学において、およそ10年後の到達点を視野に入れ、これまでの図書館の姿に捉われることなく、大学の理念実現を支える先進的・開放的な図書館像を提示することを目的とする。

社会のデジタル化やインターネットの発達によって、研究・教育の遂行に必要な知識・情報のあり方は変化し、図書館に求められる役割も大きな変貌を遂げている。大学関係者が海外の大学図書館等を訪問した際に、日本の図書館とは異なるその現代的・先進的な姿に衝撃を受けたという話をしばしば聞く。科学技術先進国であったはずの日本が、米国発の巨大情報企業に席捲され、またたく間にデジタル後進国となってしまった現在の状況をパラレルに想起させられるものである。

横浜国立大学は第4期中期目標において、新たな社会・経済システムの構築やイノベーションの創出・科学技術の発展に資する「知の統合型大学」として世界水準の研究大学となることを目指しており、研究・教育を支える図書館もまた世界水準となることが求められている。また同時に、本学が立地する横浜・神奈川に貢献し、大学における研究等の成果還元を媒介することのできる図書館でもなければならない。

本ビジョンは、横浜国立大学附属図書館が本学における世界水準の研究を支援し、教育・学修へと接続し、さらに地域に貢献することのできる大学図書館であるための未来像を示すとともに、その実現へ向けての指針を示すものである。

■ 基本理念

横浜国立大学附属図書館は、世界水準の研究大学における図書館が基本的に備えているハード・ソフト両面にわたる各種機能をベンチマークとしつつ、世界水準の研究（及び世界水準の研究を基盤とした教育）を支えるに足る先進的な大学図書館の構築を目指す。

また、本学が「グローバルとローカル（横浜・神奈川）をつなぐ頭脳循環の拠点」を目指していることを踏まえ、地域（ローカル）に貢献するとともに、地域と世界（グローバル）を接続する媒介となる開放的かつ国際的な図書館を構築する。

さらには、大学図書館としての「知の共有」「知の創出」「知の媒介」（国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン2025～、令和3年6月25日、<https://www.janul.jp/ja/organization/vision2025>）の充実・推進をはかり、目指す図書館像の実現に必要な資料・情報の収集、人材の育成・確保、空間の整備を行い、時代に即し「もの・ひと・ば」のバランスのとれた図書館運営のモデルを構築する。

■ 近未来の図書館像

これらの基本理念を具現化する図書館は、どのような姿であるべきなのか。5つの展開軸を設定し、図書館が今後進むべき基本的な方向性を示す。

なお、以下の5つの展開軸はそれぞれが独立しているものではなく、相互に関連していることをあらかじめお断りしておく。

1. 【知識基盤】世界水準の研究と教育を支える学術情報基盤の構築

世界的な潮流を視野に、情報の収集・蓄積のみならず、知の創出・オープン化を推進
大学図書館の基本的な役割は、研究と教育を進めるうえでの基盤となる知識・情報の収集・蓄積と共有であり、今後10年間においてもその役割は大学図書館の核でありつづけると思われる。

しかしながら、知識・情報のデジタル化とネットワーク化がすでに世界的に進展している中で、知識・情報の内容や形式、入手・共有・利活用的手段や方法はさらなる変容を遂げていくことが予想される。

大学図書館が現在の世界的な潮流を踏まえ、世界水準の研究と教育を支える学術情報基盤となるためには、

- (1) 知の「収集・蓄積・共有」に加えて、知の「創出」の基盤としても機能する図書館の構築
- (2) オープンアクセス・オープンサイエンスの潮流の中で、知のオープン化を進める拠点となる図書館の構築
- (3) 急速に進む知の様態の変容（デジタル化、流通の多様化、AI・ビッグデータの活用、人的交流による知的活動等）に対応する図書館の構築が求められる。

2. 【交流空間】ポストコロナの時代における図書館空間の再構築

多様な学生教職員が多様な場で安全に交流し知的生産性を高める空間

現在では、多くの大学図書館にアクティブラーニングスペースが整備され、図書館が蔵書を中心とした静寂な空間であるだけでなく、ディスカッションやグループワークなどを含めたアクティブな学びを誘発する知的交流の場でもあることは常識となっている。

一方で、コロナ禍において図書館の交流の場としての機能が大幅に制限され、学生教職員の能動的な活動や相互交流が困難になっている。この状況は大学における研究と教育にダメージを与えており、交流を通じた知的生産の場の早期回復は図書館の最優先課題のひとつである。

さらには、原状回復的な視点のみならず、ウィズ／アフターコロナにおける利用者の行動変容への対応や安全・安心の確保、ハード・ソフト両面からの整備による空間活用のさらなる可能性の追求を通して、図書館空間の再構築を図っていく必要がある。

ポストコロナの時代において図書館空間の再構築を行っていくためには、

- (1) ウィズ／アフターコロナの時代において、利用者の安全・安心が確保された交流空間の構築
- (2) 多様な可能性を有する図書館空間において、多様なアイデアの追求による実空間への実装
- (3) イノベーション・コモンズの一環として機能し、共創の拠点となる図書館への展開が求められる。

3. 【先進実践】DX・データ・AIの時代に対応した図書館サービスの構築

デジタル変革とイノベーション創出の場（知の実験場）としての図書館

データ・AIの活用を含むDX（デジタルトランスフォーメーション）は社会全体を覆う大きな潮流となっており、デジタル技術やデータ活用による社会変革への期待が高まっている。積極的にICT技術の活用を進めてきた図書館は、DXを推進することによって、サービスと業務の両面において、時代の求める転換を図っていくことができると考えられる。また同時に、図書館空間をデジタル技術やデータ活用に関わる知の実験場として整備していくことにより、図書館をイノベーション創出の場としても機能させていくことが可能になる。

DX・データ・AIの時代に対応した図書館サービスの構築を行っていくためには、

- (1) 図書館の創造的転換のためのDX戦略の構築と推進
 - (2) Society5.0（データ駆動型社会）の時代における新しい教育・研究環境に即した図書館サービスの構築
- が求められる。

4. 【地域共創】地域社会とグローバル社会をつなぐ情報交流の拠点

地域に即した情報・知識をグローバルに共有し、人材の交流をはかる

世界が抱える様々な課題が先鋭的に現れる横浜・神奈川に立地する横浜国立大学は、世界水準の研究を育みつつ、先鋭的な知を活用して地域の課題解決に貢献していくことが求められている。本学図書館は、世界水準の研究を支える一方で、その成果の地域への還元・浸透を図るとともに、地域の独自性に基づく情報・知識の収集とグローバルな共有を行い、大学の教育・研究活動へつなげていく機能を持った情報交流の拠点となる必要がある。

図書館を地域社会とグローバル社会をつなぐ情報交流の拠点としていくためには、

- (1) 学生教職員と地域・産業界等の間での知的交流を促進する活動と成果物の共有
 - (2) 多様な人が混ざり合い、議論やアイデアを出し合い、イノベーションが生まれていく空間の構築
- が求められる。

5. 【持続可能】持続可能な図書館運営モデルの構築

将来の変化に柔軟に対応でき、研究教育の触媒となるような専門的人材の確保

図書館の持続可能な運営を行っていくとともに、未来の図書館像の現実化を可能とする体制を構築するためには、専門的な知識・技術に加えて環境変化に柔軟に対応できる能力を持った人材を確保するとともに、学内外の多様な人材・機関との連携が必要不可欠である。

時代に即した図書館運営モデルを構築していくためには、

- (1) 図書館運営に必要な実践的知識を次代に継承するとともに、時代に即した能力開発を可能とする体制の構築
- (2) 多様な知識・技術・ノウハウを有する学内の研究者や各部署及び学外機関との連携強化

が求められる

■ 横浜国立大学附属図書館における実現のための指針

近未来の図書館像を横浜国立大学附属図書館の現況に即して実現していくための具体的な指針を以下に示す。

なお、次に示す指針は、有効と考えられる政策や実践の可能性の範囲を示すものであり、全ての項目を具現化することを要件として求めるものではない。

1. 【知識基盤】世界水準の研究と教育を支える学術情報基盤の構築に向けた指針

(学術研究資料の整備)

- 1.1 世界水準の研究並びに世界水準の研究を基盤とした教育のインフラとなる学術情報資料（学術図書、電子リソース、研究データ等）を確保し、安定的に入手可能な環境を構築するために、中・長期的な視野を持った学術情報資料の収集と提供を可能とするための方針を策定する。
- 1.2 電子リソースの整備において、特定企業による商業的で独占的なサービスに依存することのリスクを警戒しつつ継続的な評価をし、多様なサービスとオープンな基盤を志向するスキームの最適化を検討する。
(知のオープン化への対応)
- 1.3 オープンアクセス・オープンサイエンスの動向を踏まえ、本学において生み出された教育研究成果の機関リポジトリ等を活用したオープン化を進め、世界に発信することにより本学のプレゼンスを高める。
- 1.4 オープン化され、多様化する学術情報資源の効果的な利活用を可能にするために、ポータル機能を整備するとともに、教育研究活動のサイクルに即した情報リテラシー教育支援を実施する。

(教育・学修のための資料整備)

- 1.5 世界や地域で信頼される実践的人材の育成に資する教養的資料の適切な収集・提供を行うとともに、メディアの変化に対応した資料の多様化を図るための合理的・実効的な選書体制を構築する。
- 1.6 本学が持つ国際的なネットワークを活用し、国際化に対応した情報の収集と提供を行う。

(知の発見システムの構築)

- 1.7 大学図書館システム刷新の世界的な動向を踏まえ、世界の学術情報がより効率的・網羅的・継続的に発見できる環境の構築を目指す。

2. 【交流空間】ポストコロナの時代における図書館空間の再構築に向けた指針

(ポストコロナにおける学修環境の構築)

- 2.1 環境センサーを活用して館内環境のモニタリングや可視化等を行うなど、テクノロジーの活用によって、安全・安心かつ快適な学修環境の構築を進める。
- 2.2 オンライン授業への参加やリモートでのディスカッションを可能にする設備を整備するとともに、安心して学修や読書に専念できる空間を設けるなど、ポストコロナにおいて変化した学生の学修ニーズに対応可能な学修空間を構築する。
- 2.3 ラーニングアドバイザーの多様な場面での活用を含め、学生の教室外での自主学習や課題解決を支援できる人的支援を充実させる。

(コモンズ創成に向けた図書館空間の再編成)

- 2.4 中央・理工系・社会科学系の3図書館の役割の見直しを行うとともに、老朽化の著しい理工学系研究図書館の再整備と新たな活用を目指す。
- 2.5 キャンパスの中心に位置する中央図書館の多分野交流空間(コモンズ)としての活用を促し、教育・研究の活性化や地域交流、国際交流を促進する各種プログラムを企画・実施する。
- 2.6 分野を超えて学生・教員が集まり、新たな知を創造するとともに、それを具現化する機能を有する多様なスペース(ファブラボ、編集工房、アートスタジオ、コミュニケーションスペース、研究展示室[ギャラリー]、研究個室等)を備えたイノベーション・コモンズ型の新しい図書館プランを構築する。

3. 【先進実践】DX・データ・AIの時代に対応した図書館サービスの構築に向けた指針

(DX推進)

- 3.1 DXの理念を踏まえつつ、業務変革やサービス変革を現実に実現しうる図書館DX戦略を策定する。
- 3.2 ターゲットを意識した図書館ホームページの改修やSNSの活用など、情報利用環境の変化に対応したユーザーフレンドリーな図書館Webサービスの構築を行う。
- 3.3 国立大学図書館協会等での検討状況を踏まえつつ、紙、電子、デジタルリソースを

一元的に管理・提供できる共同運用型図書館サービスプラットフォームの導入を目指す。

- 3.4 オンライン授業や遠隔学習の場面において活用できる図書館サービス（電子ブック、デジタル教材、オンライン相談機能等）を充実させるとともに、利便性の向上を図る。
- 3.5 図書館システムや各種センサー等から取得されるデータを多面的に分析し、得られた知見を図書館運営に活用する。
（データ・AIの活用）
- 3.6 本学の研究活動で発生する主要な研究データの永続保存と社会的共有を促進するとともに、退職教員等が保持していた研究データのレスキュー活動を行う。
- 3.7 教育・学修や研究活動において、必要なデータを入手し、AIによる分析を可能にするなど、有効に活用できるようにするための支援サービスを行う。
- 3.8 地域や世界から収集したデータをリアルタイムに可視化する機能や、VR空間体験室、モーショントピクチャや行動モニター、AI端末などの実験的環境を有するイノベーション創出空間（知の実験場）としての図書館の未来プランを構築する。

4. 【地域共創】地域社会とグローバル社会をつなぐ情報交流の拠点構築に向けた指針

- 4.1 関係部署と協力し、地域・社会との共創活動による実践記録や実務的資料を収集整理し、これまで在野にあり未公開または入手困難であった教育研究資料（地域アーカイブや区市町村の地域経済データ資料など）を機関リポジトリやデジタルライブラリー機能を活用することにより、デジタル化・公開を促進する。
- 4.2 図書館及び周辺スペースの活用を通したリアルな交流の場を整備するとともに、多様な実験の場としての機能強化を通して、イノベーション・コモンズの一翼を担う図書館の構築を目指す。
- 4.3 交流の場において、研究成果発信や芸術文化創造に関わる各種プログラムの開催を促進し、学部や学内外の垣根を超えた異分野融合コミュニケーションの活性化を通して、共創活動の拠点構築を目指す。

5. 【持続可能】持続可能な図書館運営モデルの構築へ向けての指針

- 5.1 図書館運営に必要な実践的知識やノウハウを確実に次代に継承するとともに、大学の教育研究及び学術情報流通をめぐる環境変化の中において求められる新たな能力を育成し、確保することを可能とする体制を整備する。
- 5.2 未来の図書館像を現実化していくための研究開発機能の整備を視野に入れ、本学の教員やURA等が図書館の機能強化に関わる調査・研究や技術開発・実装等に図書館職員と共に関与・参画することのできる体制の構築を目指す。

- 5.3 新しい研究支援機能を実現するために、データ作成支援のためのアドバイザーやデータライブラリアン等の導入・育成を検討する。
- 5.4 設置形態の異なる近隣地域（主に神奈川県内）の図書館あるいは関連機関等との間での人事交流・相互研修等を含む協力関係のあり方を検討する。

■ 補足事項

当ビジョンは、数値目標を示して計画の達成度を評価することを目的とする事業目標・計画ではなく、教職員やステークホルダーが図書館の将来イメージを共有することを通して、横浜国立大学附属図書館を時代に即して発展させていくための行動の方向性を示す役割を果たすものである。

従って、その扱いは次のとおりとする。

- ・定期的に実施状況を取りまとめ、附属図書館運営委員会や全学委員会等において報告するとともに、教職員、学生、ステークホルダー等からのフィードバックの機会を設ける。
- ・当初の指針を絶対化するものではなく、情勢変化に応じて柔軟に見直しを行う。